東女医大誌　第80巻　第12号
頁　376～377　平成22年12月

学会・研究会抄録

第36回東京女子医科大学神経懇話会

日時：2010年6月29日（火）18:00～20:00
場所：東京女子医科大学　臨床講堂2

一般演題　18:10～19:00　　座長（第一病理学）澤田達男

1. 遷延した経過を示した直静脈洞・左横静脈洞血栓症の剖検例
（[1]東京女子医科大学第一病理学，都立神経病院[2]検査科，[3]神経内科，[4]都立北療育センター内科）
廣井敦子[1,2]・望月葉子[2,4]・板東充秋[3]・水谷俊雄[2]・小林槇雄[1]
2. 脳原発の移植後リンパ増殖性疾患について
（東京女子医科大学[1]神経内科，[2]第一病理学，[3]脳神経外科，[4]腎臓外科，[5]泌尿器科）
鈴木美紀[1]・小濱　愛[1]・柴田亮行[2]・赤川浩之[3]・三宮彰仁[4]・田邉一成[5]・内山真一郎[1]
3. 若年発症したTumefactive MSの2例
（東京女子医科大学[1]小児科，[2]脳神経外科）岸　崇之[1]・村上てるみ[1]・齋藤聖子[1]
佐藤孝俊[1]・舟塚　真[1]・藍原康雄[2]・大澤真木子[1]
4. ウイルスを利用した標識法による海馬周辺皮質単一ニューロンの軸索形態の解析
（[1]東京女子医科大学解剖学，[2]京都大学大学院医学研究科高次脳形態学，
[3]東京農工大学大学院農学研究院獣医解剖学）
本多祥子[1]・古田貴寛[2]・金子武嗣[2]・柴田秀史[3]・佐々木宏[1]
5. インテリジェント手術室におけるグリオーマ摘出術について
（東京女子医科大学[1]脳神経外科，[2]先端生命医科学研究所先端工学外科分野）
田中雅彦[1,2]・村垣善浩[1,2]・丸山隆志[1,2]・乙供大樹[1]・小西孝典[1]・谷野絵美[1]・
生田聡子[2]・鈴木孝司[2]・吉光喜太郎[2]・伊関　洋[1,2]・岡田芳和[1]

特別講演　19:00～20:00　　座長（第一病理学）小林槇雄

変性疾患細胞死モデルとしての転写障害性神経細胞死TRIAD
（東京医科歯科大学難治疾患研究所難治病態研究部門神経病理学分野）岡澤　均

当番世話人：（東京女子医科大学第一病理学）小林槇雄
共　　催：東京女子医科大学
エーザイ（株）

1. 遷延した経過を示した直静脈洞，左横静脈洞血栓症の剖検例

（[1]東京女子医科大学第一病理学教室，[2]都立神経病院検査科，[3]都立神経病院神経内科，[4]都立北療育センター内科）　廣井敦子[1,3]・望月葉子[2,4]・板東充秋[3]・水谷俊雄[2]・小林槇雄[1]

〔症例〕死亡時88歳男性．前立腺癌に対しLH-RH agonistを使用中，約1ヵ月にわたって徐々に意識障害が進行し入院．5年後肺炎のため死亡．〔病理所見〕脳重量は1195g，表面の形態は保たれ，両側中心部灰白質・深部白質，後左側頭葉・後頭葉・小脳半球は褐色に変色し軟らかく，組織学的にヘモジデリン沈着を伴う多彩な虚血性変化が混在していた．直静脈洞は器質化血栓により閉塞しており，病変部の静脈，毛細血管には壁肥厚，内腔狭窄，閉塞が観察された．〔考察〕病変の分布と病理組織学的所見から，直静脈洞，左横静脈洞血栓による静脈性梗塞と判断した．動脈性梗塞によるpannecrosisとは異なる本例の病理像は，静脈性梗塞の機序によく合致している．広範な病変形成には，長期間に及ぶ静脈圧亢進が重要な役割を果たしたと考えられた．血栓形成には前立腺癌の存在やホルモン療法，脱水，乳突蜂巣炎が影響したと考えられた．